

登山道開拓記



目次

第一章 はじまり

第二章 船山天皇宇宮「跡地」探し

第三章 船岩神田宮発掘整備

第四章 特殊器台発見場所確定

第五章 トレランとの出会い

第六章 水神広場開拓整備と岩根山縦走コース

第七章
新人生

第八章
松茸絶滅

第九章
夢吊り橋「ルート開拓

第十章
御調一周コース完成

第十一章
終わりに

里山開拓記録

第一章 はじまり

それは五年前少し春めいて来た2018年二月二十日から始まった。里山地^{じょうざん}王山、標高236mを縦走し雨乞い神社の龍王社に行くオカンノロコース¹である。草刈り機をもって50メートルの道ができた。(オカンノロは地名です。地元で昔から呼ばれています。文字を知ってる人も、意味を知っている人も居ません。私の推測では「丘野呂」では無いかと思っっています。この場所は傾斜もゆるくなだらかな地形になっている野呂の形態なので当たっている様に思います。)





ブルーの点線が初めて造ったコースです。標高差約136m全長約300m。成せばなる、最初はもうにもならないと思っていたが、やれば出来る。これで自信がついた。少しづつ「進めていきます」。

マツタケが全く出なくなり山に入る人が約50年間無くて、荒れ放題の山道を昔の感を頼りに作業を進めてみた。私は1943年生まれで75才と少々過ぎた所です。75歳の誕生日を迎えた時、残りの人生をいかに生きるか模索していた。五十五歳で大都会の横浜から故郷に帰り二十年経った。その間に住まいの整備も終えて一段落した。趣味で始めた木工では仲間と一緒に毎年展示即売会等も行い、多くの知己を得ることも出来た。しかし二十年も経つとアイデアが出尽くし、人々の関心も住居などより、インターネットやスマホなどに移り一変の様相になった。

さてどうするか、いろいろ考えてみて辿り着いたのが登山道の整備である。猪が里の住宅付近に出没し農作物を食い荒らす。この原因を考えた時、それは人が山に入らなくなった性だと考え、沢山の人が山に入る様になれば猪も恐れて山奥に帰ると思うのだ。



一方山道を放置すれば全てが山になり何処に道があったかさえも分らなくなつて更に荒れる。

私の年代では子供のころ山で遊び回り回っていたので道も記憶に残っている。しかしそれ以降の若い人達は全く分らないであろう。今山道を整備しておけば、これから先少しは山を知ってもらえる。これを次世代に引き継いでいく必要がある。社会に今まで少しも貢献して来なかつた者の恩返しにもなろうと思ひました。

案の定昔を知っている私でさえも、山に入ると全く分らない状態です。

50年前には樹齡100年を超える赤松が立ち並び雑木はなくて箱庭のような山であつたが、今は松が全部枯れ雑木が生い茂り全く先が見えないひどい状態になっていました。

なぜこの様になつたか？原因の正確な分析は専門家に譲りますが、プロパンガスが普及し料理の煮炊きに木々を燃料にする必要が無くなつた。

農作物の肥料として利用していた草木の堆肥が科学肥料の出現で不要になつた。車の出現で、農耕や運搬に使っていた牛馬が不要になつた。それらの要因が絡み合つて山の木々が疲弊して松枯れが進行してきた。

それまで里山では秋になると沢山のマツタケがとれ農家の貴重な収入源であった物が松枯れにより松林が無くなり全く獲れなくなつて来ました。そのため山は魅力を失い誰も寄り付かなくなりました。

松枯れの原因がマツノザイセンチュウであるという事で、ヘリコプターまで動員し殺虫剤を撒き微生物を一網打尽にする。これにより山の生態系は大きく狂い現在のような再生不能状態に陥っているのです。

現在でも松の枯死は進行中であり原因はもつと別にある様に思えます。例えば酸性雨や地球温暖化など。

どこから手を付けて行けば良いのか困つてしまいました。幸いなことに2009年以降、中止されている地籍調査のための杭が山道に打つてありこれを目印にしながら作業を進めることができました。

地籍調査とは国が行った仕事で特に山の境界を定める作業です。人工衛星で起点を明確にして行きます。この作業はは政権交代で民主党になった時無駄であるとの事で中止されました。



この様な重要な作業が未完のまま残されることは懸念されます。

確かに直接の原因はマツノザイセンチュウであつたかも知れない。一網打尽にすべく、来る日も来る日もヘリコプターで農薬を散布した。センチュウも死んだであろうが、その他大勢の全てに生物が死んでいった。そして山は見るも痛々しい感じになり、今も松枯れは続いているのである。人々が薪を必要としなくなり、マツタケがでないので山の価値を見つめなくそして材木も海外から安く輸入し国産材は見捨てられた。その結果山が荒れて人心も荒廃した。国破れて山河ありではなく、山河敗れて人はなしである。人も地球の一員、自然を失つては生きて行けない。マツタケの最盛期は楽しかった。マツタケ狩りに観光バスが来た。お客さんは松茸狩りをした後、山頂の広場などで焼き鍋を囲み酒盛りである。この風景も再び見ることはなからう。手に入れたものも多いが、失つたものは遥かに多い。ここで一度リセットか？

松茸の話が長くなったので他へ移らう。

注) 以下はウエブの記事より引用した。

マ

ツノザイセンチュウというのは、長さ1ミリの線虫(ミミズを小さく、透明にしたようなもの)で、北アメリカから入ってきた生物です。

この生物が、マツの幹の中で増えてくると水の通り道をふさいでしまいます。そのため、マツの葉が急に赤くなって枯れてしまうのです(「マツ材線虫病」という病気)。でも、マツノザイセンチュウは自分で元氣なマツの木まで飛んでいくことができます。マツノザイセンチュウはマツノマダラカミキリをうまく利用して元氣の良いマツにとりつき、マツを枯らすほど数を増やしながら、また次のマツノマダラカミキリの体に乗って次々に広がっていきます。

マツノザイセンチュウはもともと北アメリカにいたもので、北アメリカでは元氣なマツを枯らすことはないようです。これは、長い間にマツとセンチュウの関係がうまくできあがり、弱ったマツを少しだけ枯らすことで、マツもなくなならない、線虫もいなくなならないしくみになっています。日本のアカマツやクロマツはマツノザイセンチュウと出会って100年くらいしかたっていないので、抵抗力がほとんどないのです。アメリカでもヨーロッパ原産のマツはマツノザイセンチュウによって枯らされず。

スタートしてから一か月、道にはみ出した木や枝シダなどを伐採し、3月10日初期の目標である里山「地王山」の山頂236mにある龍王神社まで開通した。この作業で一番苦勞したのは竹藪です。背丈より大きく伸びた藪の中に入ると方角が全く分からなくなり、ある時山の持ち主と一緒に行ったが方向を見失って迷ってしまった。大きな山でもないのに迷うと不安になりただガムシヤラに歩いて目指す道にたどり着いたことがあります。この時の教訓は、地図と磁石を携行する事、山は尾根筋を歩くこと、谷や尾根を横切つて進まないこと（これをトラバースという）。頂上に向かつて行くときは迷わないが、下るときは尾根筋を間違えると大変なことになること、などなど貴重な体験ができて、大いに役立つ。頂上に向かうときは頂点が一つであるが、山を下る時は尾根と谷が幾筋もあり、下りのスタート方向を少し間違えても、裾野に行くに従い段々広がっていくので、私はこれを傘の骨を例に挙げ説明しています。これを経験した苦しい出はそれから、の里山開拓に大変役立ちました。

仕上げに電柱の古木を利用して道標を作り、友人の書家に書いて貰い設置した。

名称は「いきいき登山道」これは御調町によって造られた、川沿いを歩く「いきいきロード」があるため、その向こうを張り登山道にしました。

スタート地点の天満宮から約300m、

3月31日初お披露目として、町内会の役員や市役所の町おこし担当を引率して見てもらい自前で細やかな弁当とコーヒーを準備して鯨岩の上に車座になり召し上がって戴いた。鯨岩はまるで鯨が三頭ほど群れを成して泳いでいるように見える巨岩で私が命名した。里山開拓の記念すべき一日となりました。

その後子供を招いて体験ミニ登山も企画したが、残念なことにこの頃当地区では初めてである、熊の出没情報が多数出てきて、残念なことに中止した事もある。これは私見ではあるが、山並みハイウェイの開通によって、熊が棲家を追われたせいではなかろうか

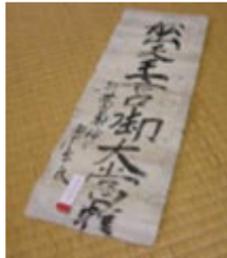


第二章 船山天皇宇宮「跡地」探し

五十二代続く神田神社の宮司、幣原信忠氏が所蔵する古文書に記録がある、神田神社の歴史について記載された一部分に、清和(858～876)陽成(876～884)光孝(884～887)三天皇の時代三十年を収めた編年体の実録に記載されている。

八六〇年二月二八日条に「備後国正六位上、神田神に従五位下を授く」とあります。神階 従五位下に陞階(しようかい)された尊い古社であり国史見在社である。やがて天禄(てんろく)年間(九七〇～九七三)に旧「御調郡市村大字貝ヶ原小字船山口(ふなやまぐち)に遷座し、その地名に基づき船山天王宮(ふなやまてんのうぐう)船山祇園宮(ふなやまぎおんぐう)船山牛頭天王宮(ふなやまごずてんのうぐう)と称された。現在もこの地には社殿の垣、磴(いしだたみ)及び御井(みい)等が存在する。

この様な詳しい記録があるが、今この場所をはつきりと示せる人が居ないので。山との付き合いが薄くなり、生活様式も変わる。昔を知っている人が居なくなりました。



この辺まで水が来ていたのじゃ。

山の中腹から貝がようけ出るのもそのためじゃし、「潮カベリ岩」というて潮で掘られたよ
うな跡がはつきり残つとるじゃろう。せえて、一番適したのを取つて貝ヶ原という字名にし
たのじゃ。

それからずうつと後の、平安時代になつての話しじゃが、殿さまの行列がこの辺をお通りにな
つた時のこと、馬に乗つた高貴な方達が舟山神社のまんまえにさしかかると、どうしたも
のか、みんなばたばた落馬してしもうた。もちろん負傷者がようけ出てのう、祈祷してもろ
うたところ、「このような高い所に祀つてあつたのでは参拝者が少なくて駄目だ。どこか人
の沢山参つてくれる所に安置せい」とので、山から下ろして置いたのじゃ。

ところが不思議なことにそれから、一人も落馬者なくなつたし、無事故で交通が出来るよ
うになつた。

その宮というのが現在の早道宮（僧堂宮）なのだが、その当時は「神武多神社」と言われておつ
た。

それから後になつて、昔から伝わる社歴をひもといてみたところ、「神田神社」が本当の名

だどでていたのでのう、現在のようになったのじゃ。

今では正月ともなれば、あれでも一千人くらいは訪れるじゃろうか。むかしは市はもちろん、上川辺からも大和、綾目からも方々から沢山こと、参拝者があつたもんじゃ。

今でも、旅行に出る時に参拝して神社の砂を少し紙に包んで行くと、事故が起らないと言われているそうじゃ。

以上民話集抜粋

2018年四月、現在ある神田神社の前身があつたという古文書を入手して、記録を基に探索開始。

昔の事を知っている人を探してみたが手掛かりになるもの見つからない。三週間ほど手探りで探している時、同じように探索していた安藤さんから見つかったとの電話があつた。

。地域の有志で現地を確認したが明らかに間違い、それは地名が全く異なることである。古文書には船山口とあるが、そこは潮齧り石である。また湧き水の井戸がない。

天皇宮探索中五月十三日にケーブルテレビの取材があり、昔開墾された畑の石垣が跡地であるという事になり、明日は放送するという話で慌ててここは違う、と伝え中止してもらっ

たエピソードもある。

それ以来多数の人に聞いて回ったが知っている人は全くいない。女性の高齢者が多数居られるが、他所からお嫁に来られた方が殆どで

こちらの事は分からない。天皇宮の裾に住んでおられる男性豊田さんを訪ねたら昔日照りが続くと山の井戸まで水を汲みに行ったというお話が聞けた。案内を頼んだが足が悪く無理だと言われた。

止むを得ず話を頼りに散々迷って辿り着いた。そこに水が流れているのを見た時嬉しくて歓声を上げたそれは2010年一月三日の事である。遂に船山天皇宮跡地を発見した。湧き水が出ている事が根拠となる。この場所は1999年七月に大規模な土石流が発生して、地形が大きく変わり、昔の面影がない。井戸があつた場所が深さ十メートル長さ100メートル（推測）に渡り流されて、両脇が残ったわけである。この場所は昔井戸があり、夏場の水枯れ時期には近くの人たちが利用していたそうだ。

その証拠に井戸枠を形成した釘が多数出てきた事である。恐らく大雨で地下水が限界を超え土石流を招いたのであろう。そのため古文書に書かれた井戸の姿はない。

しかしながら、その場所を掘ると古墳時代の土器の破片が多数発見された。幣原宮司によると神前で使用した器は、すべて破棄したそうで、それが埋まっているということだ。石畳の一部は裾野の天満宮の上り坂付近にあります。石垣は長年の崩落で殆ど分らないけれど、それらしい場所もある。そしてこれ以上の適合する場所は見当たらない。

2019年六月一日神田神社に振興区長の宮前さん、探索貢献者の金野幸江さん、宮司（幣原さん）が集まり 船山天王宮場所決定を行った。幣原宮司が認定された文章の一部を記す旧神田神社跡地を貝ヶ原船山山中に比定する理由 令和元年神田神社の跡地を探索しておりましたが、このたび貝ヶ原の有志の方々のご協力を頂き、下記の理由によりその跡地を船山山中に比定致しました。

場所が確定したところで、2019年十一月に巨岩のご神体にしめ縄を巻き、鳥居を立てて、その後2019年十一月二十四日には関係者十人が現地を集まり、船山天王宮 奉告祭実施。

幣原宮司認定文書から

① 「神武多（神田）神社御由緒調査書（別紙参照）」によると「天禄年間970～973」御調郡市村大字貝ヶ原小字船山に移祭し船山天皇宮と称えり」とあること。

②、また同調査書に「今に社跡の垣礎（いしだたみ）及び御供川等存在せり」とあること

③ 貝ヶ原の船山口から現在の鎮座地御調郡市村字神東に移祭されたのは文和年（1532～1356）と言われており、すでに660年を経ているので、社跡の垣礎（いしだたみ）は壊れており整然としたものはない。

④ しかし御供川と称される川は古来よりその流れは枯れたことはないとわれ、現在厳然と流れている。

以上抜粋しました。

備後国御調鎮座

御由緒

神田神社 御由緒

御由緒 (PDF)
御由緒 (PDF)



こうして一年七カ月に及ぶ船山天宮探索は終わった。最も苦勞したのは、知っている人を探すことでした。今後ますますこの様な事態は増えるでしょう。歴史の消滅は残念なことです。その後折角見つけた場所がわからなくなっても困るので、幣原宮司にお願いして、

ステンレスの板に由来を彫った説明版を建てました。



第三章 船岩神田宮発掘整備

船山天皇宮が見つかったところで、更にその前身である、船岩神田宮の場所探しを始めることにした。これは幸いにして場所も明確で、知っている人も多かった。

場所の関係を明確にするため、当時の地名など分る範囲で調べた。

一、「国号「日本」とは

989年に「飛鳥浄御原令」、さらにつづいて101年には「大宝律令」が制定され、それによって国号も「日本」に定められたと考えられています。

まえに書いたように、日本国内にのこる史料ではいつから「日本」とよばれるようになったのか、明確な記録がのこされていません。

ただ中国の史料によると、はじめて「日本」という国号が対外的に使われたのは、702年に派遣された遣唐使からだと言われています。

二、「備後国」とは

「備後」の名称と由来



吉備国を備前国（後に美作国も再分割）、備中国、備後国に三分して設けられ、藤原宮からでた木簡に「吉備後」と表記したものがあつた。平安時代の『和名類聚抄』は、備後国を「きびのみちのしりのくに」と読む。

三、「御調郡」とは

郡名の初見は平城宮出土木簡で「備後国御調郡諫山里」とある。「和名抄」では沼隈郡に諫山いさやま郷があるから、郡域に変更のあつたことが知られる。「万葉集」巻一五には「備後国の水調郡の長井の浦に船泊てし夜作る歌」三首がみえ、「水調郡」とも書き、「和名抄」国郡部に「三豆木」の訓注がある。平安時代には「三調」（嘉応元年一二月日付「備後国大田庄沙汰人実次解」高野山文書）とも表記された。近世までの御調郡域はほぼ現御調郡・因島市・三原市東部・尾道市西部・府中市西南部である。

四、「古代山陽道」とは

古代山陽道が御調川沿いに当郡を通過し、三原市八幡やはた町を経て久井町坂井原さかいばらに至り、真良しんら駅（現三原市）へ通じたと考えられ、「延喜式」の者度いつと駅は御調町市いちに比定する説が有力。

本題にもどろう

神田神社の由緒には

当神社は旧「御調郡上川辺村大字本村」にあつて古くから「舩岩（ふないわ）神（かん）田宮（だぐう）」と称していた。これは社殿のそばにあたかも舩（ふね）のごとき大きな岩があつたためこのように呼ばれていたという。この岩は今もなお旧鎮座地なる本村の城山の城跡にある。と記されている。

そして江戸時代に編纂された芸藩通志という書物の中にも明確な記載があつて困ることはなかった。ただ問





題は長年放置されているので、道の痕跡が残っていないことである。それと私自身が知らない場所のため知識が全く無くて、人の話を頼りにするしかなかった。しかしながら現代は人工衛星によって遥か上空より撮影が可能で素晴らしい地図が自由に見られて、困ることはなかった。

貝ヶ原から東へ約二kmの所に、通称「城山」正しくは「カキノキ山」標高330メートル、南側の古代山陽道から見ると、富士山のような姿をした山があります。この頂きにご神体があったそうです。

昔の人がこれを崇めたことは十分理解できます。この山は花崗岩が風化した砂地であるため歩きにくく、正に富士山の火山灰を歩く感じである。北側のルートは登山口の標高が南側より少し高いのでルートは短くなる。本村から千堂に向かう車道の分岐点から登り始めるが、裾に川が流

れていて竹藪が生い茂っていた。20メートルぐらい進むと雑木に代わり楽になる。一方傾斜は強くなり大変だ。頂上に水などあったのか分からない。

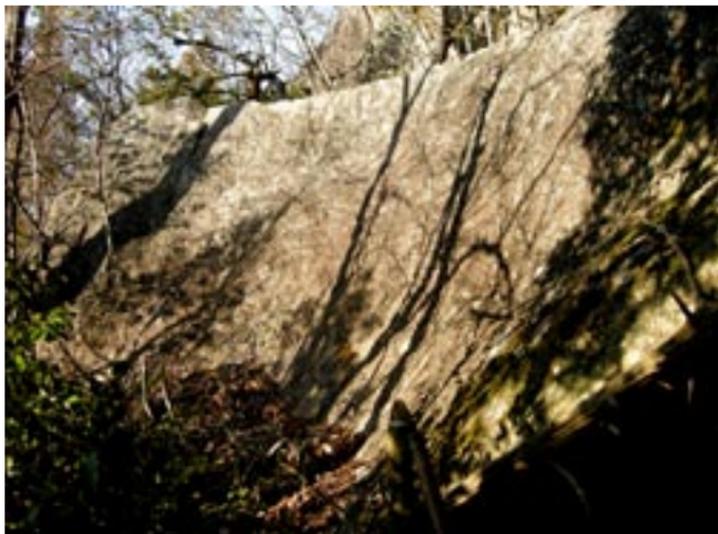
2020年一月十九日北側ルート開通。

頂上はかなり広く二段になっている。

その南側に素晴らしい巨岩があり、尖った先端が三角点(330m)です。南側の裾が国道486号古代山陽道である。府中の駅家の次がうつどであるがこの場所が判然としない。御調の北側に宇津戸という所があり似ているのが原因です。しかし地形から見て府中から御調八幡宮に向かうルートが普通に思える。そうなれば必然的に御調町のどこかに駅家があった。

これが判明すれば素晴らしい文化遺産とな





ろう。西方面には御調八幡宮に向かう川筋が見える。東は当然府中の駅家に向かう。北は中国山地に向かう山並みが続く。この地で東西の勢力及び山陰側の勢力争いが続いた。そのためこの周りには数多くの山城が存在しています。

次に南側ルートである。

本村の集会所辺りから北側に向かつて頂上を目指します。このルートは北側ルートよりなだらかではあるが、距離は長い。道はやはり風化した花崗岩の砂で、頂上に向かうに従い滑りやすく大変だ。中腹どころに小さな祠があつて山伏の姿をしたご神体が祀つてある。その周囲には巨岩が囲み



大きな一本杉が立っている。この場所は下の国道からも良く見える。

それを過ぎると傾斜は幾分緩やかで歩き易くなる。さてご神体はどれか、丸木舟が舳先を上にして立っていたというが、それらしいものがない。どうも横倒しになったようだ。写真に示すの大岩の左端の色だ白っぽい。

この部分を下にして立っていたと思われます。時期は大災害をもたらした1999年ではないか、

周辺には大きな木が根こそぎに倒れたものもある横幅の最も広いところが3m舳先から艫までが5m。正に巨大な舳岩です。

古代の人々はこの形に敬意をもつてご神体とあがめたであろう。船は貴重な運搬用具できつと大切にしていたと思われれます。

話が横道にそれるが、山の頂には必ず大きな岩があります。これは長い年月の間に周辺の土砂が流出し大岩が頂上に残ったという事だ。現在の神田神社はこの地で生まれ、時の権力者により貝ヶ原に移された。その時分貝ヶ原は大きな勢力を持っていたのではなからうか？古墳の数が多いのも裏付けとなるう。

下山の時道に迷った。行きの時切った後の木がない、目印のテープも見えないことに気が付いた。道を間違えたことは確かだ。おおよそ間違えた地点は見当がついた。尾根筋が分岐した所だ。

行きと帰りの景色はまるで変わるので注意しないとイケない。かなりきつい傾斜で約30メートル引き返す必要がある。引き返してみるとやはり、思った通り左折する所を真っすぐ進んでいた。帰り道はは疲れているし、時間も遅くなって慌てる。しかしこは登山の鉄則道理を守って無事に下山できた。正しい道に帰れて一安心。急がば廻れこれも大事な教訓です。

次に裏付けの証拠の一つ特殊器台発見に進みます。

第四章 特殊器台発見場所確定



御調町が誇る歴史遺産の特殊器台は1968年に発見されながら、実に今日までの51年間余り人々に知られずに来ました。この様な事態になったのは訳があります。

遺跡などが発見された場合工事は中止され、調査が始まります。自ずと工事期間が延び困るため秘密にされました。今ほど文化財に対する重要性の認識も浅かったです。道路拡張を最優先したためである。そのため発見現場が明確に記録されなかつたのです。広島県内では三次とこの二か所のみ、御調の物は殆ど破損がなく歴史的価値は極めて大きいと言われています。

発見されたのは、国道486号(写真の右下)の拡張工事により、埋め立て用の土(写真中央部分の白い所)を掘っていた現場である。

場所探しの一歩は、先ずこの場所に住んでおられる内海さん宅の訪問だ。内海さんは山並みハイウェイ工事のためこの場所に移転して来られて、



何もご存じなかったが、この地のどこかで出た、という事は言われた。かなり広い土地で、どこかという事はさっぱりわからない。仕方がないので、当時工事を請け負った久井町の井上建設に電話した。

発見当時の社長はお亡くなりになっていて、娘さんが社長になっておられた。ご高齢ではあったが、要件を伝えると鮮明に覚えておられた。自分は現地を見ていないが、その時の作業者はよく知っている。出土した土器は貴重な物であることは誰にも明らかであったが、公にすると工事がストップして困るという理由により、貝ヶ原のどの場所から出てきたのか、当事者以外は知らされなかったのである。

この場所確定するため、作業者を訪ねることにした。

2019年十一月二十五日の事である。工事に関わった作業者は四名、そのうち一名だけ生存されているという事だ。貴重なたつた一名の生存者のお名前は「重森」さんである。余り住まいが遠くなかったので直ぐにお訪ねしてみた。重森さんははつきりと覚えておられて、特殊器台土器は、墓の下にあった。工事の邪魔になるので、墓を動かさし、シヨベルで掘ったところ、かちんを何かに当たる音がした。何かあると直感して、周りを人力で掘り進めたら出てきたそうだ。現物の上端が欠けているのはそのためである。その周りに欠

がいた証明でもある。そしてその下に特殊器台土器が埋められていた。これらを祀った時にはさぞかし大祭典が行われたことであろう。古代ロマンが掻き立てられる。

特殊器台は主に吉備の国(岡山県)はその当時の最大勢力で、この地は勢力圏の西端である。何のために祀られていたかはわかる人はいない。宝篋印塔は奈良時代のもので古い方だという。地元ではこのあたりを「コマルコウ」と呼んでいる。良く見ると小山が半円球状で、ある人曰く、古墳ではないか?コマルコウの東側を流れる所に「コウノミゾ」と呼ばれる農業用のため池がある。これも関連がありそうで興味をそそる。現在現物は尾道の博物館(久保町)に展示されている。発見当時レプリカが3個作られていて、そのうちの1個が河内公民館の中にある、倉庫に眠っている。常時は鍵が掛かっていて見る事ができない。何とか、図書館などの余地に展示して出来るだけ多くの人が見られるようにしたいものである。

発掘された場所には標識(写真)を設置しています。発見当時のエピソードを聞いた。見つけた社長は、これはきつと大切なものだと感じ、役場に届けたそう。



受け取った担当はその価値が分らず、暫く土間の放置していた。それを見た社長は怒って持ち帰った。役場の担当は困ってお詫びに行き返還を頼んだ。只で返すわけにはいかない。娘（現在の社長）の結婚式があるので歌を歌えば返してやるという事にして落着いたそうである。どんなに貴重な物でも価値が分らない人にはただの土器という事だ。御調町が自信を持って誇れる遺産は大事に後世の人々に受け継いでもらいたい。

貝ヶ原という地名は考古学者の間ではよく知られる存在だ。ということを私は東京で気化された。その時には感動し生まれた場所を誇りに思ったものである。若者の皆さんに自分の故郷を自信を持って自慢してもらいたいと願う。

第五章 トレランとの出会い



私は登山道を整備しながら何時も気がかりが在りました。それはこの道を整備する人がいなくなったら、二年もしないうちに元の姿に戻り二度と歩くことが出来なくなるといふ想いを抱えて居ました。

1982年十一月二十四日、中央広場で盛んに写真を取っておられる方に出会った。不思議に思ったので声を掛けてみた所、京都にお住いの「庄司」さんと言われた。この出会いは私にとって正に天の恵みに思えました。これで憂いていた心配が一挙に解決すると思つた。

そこで初めて「トレラン」という言葉を知り、山野を走り回るスポーツという事が分つた。庄司さんは親友の「首藤浩太」さんの依頼で、御調にトレランのコースを作るために来ておられた。コースは通常100マイル（160 km）あるそうで、八田原

の夢吊り橋まで考えていると言われた。そんな壮大なコースが造れるのかと、半信半疑で聞いていた。

首藤さんは、スポーツ用品を製造販売されていて、トレランの世界ではかなりの有名人であった。佐賀県のお生まれで、スポーツ用品のメーカーを興され広島に住んでおられた。尾道方面の方がコースを造りやすいという事で、こちらに移住されたそうである。

そのような人に山で知り合えたことは、私の願いである「山に入る人を増やしたい」という想いにピッタリと合った。これは正に天の定めではないか。地元の人には余り関心を持たれないが、他所の人には魅力があるようだ。嬉しかった。彼がここにコースを造ろうと思われた最大の理由は、我々が四年かけて整備したところが素晴らしく綺麗であったことだと言われた。

この辺りで、里山自然公園の整備に



尽力された方々について紹介します。

我々はチームや団体を造っている訳ではありません。そのようなグループを作ると本来の目的とは外れているいろいろな煩わしい問題が発生します。私の残された時間を無駄にすることはできません。例え一メートルでも作業に傾注したいと思います、そんなわけで

それぞれが、自分の考えに基づいて行動しています。お名前を列挙させて頂きます。女性の橘和さん、金野さん、和智さん夫妻、男性の石田さん、以上五名。この方たちの協力あってこそ出来上がった道なのです。この場を借りてお礼申し上げます。

「本当にありがとうございます」

あくまで自分の趣味の範囲でやっていることで、損得勘定なし。

自分が満足できれば良いのです。時々言われることがあります「何のために」です。例えば自分自身満足するためです。出来上がった時の喜びは何にも代えがたいものです。そして、その道を通った人が喜んでくれる姿を見た時限りない満足感を覚えます。余禄として足腰が丈夫になります。一日二万歩などといって、アスファルトの平坦地を歩き続けて



も効果は期待できません。当てもなく歩くだけの毎日には生産性もないでしょう。私はこの活動を始めてから、足腰が丈夫になりました。一昨年は石鎚山（1982m）昨年は剣山、蒜山、三瓶等々、近辺の山を片っ端から走破しています。人間動けなくなったらおしまいです。

トレランをする人達は、大会前にコースの整備をされるので、山道が綺麗になります。再々大会を行っていただける様に、魅力あるコースを数多く造らねばなりません。

先般2023年十一月二十六日には、首藤さんのグループで40キロのコースを整備されて、コースの試走会が行われました。参加者は三十名。三十から四十代と思われる若い方々がスポーツウエア姿で集まっておられる姿を見ると、将来に希望が持てて元気が出てきます。車両のナンバーから見ると、塔くは高知まで多様な車が並んでいて、遠方から参加者あることを想像できます。この方たちと話しをしていると、墓じまいとか就活の浜氏は出てきません。こんなことはあれこれ考えても仕方がないのです。残された僅かな時間でも、未来に向けた希望のが持てる話しをしたいと思えます

試走を終えられた方達がネットに感想を載せられています。が好評価な意見が沢山乗っています。ネット検索は「御調トレイル」です。

ここでコースの概要を説明します。スタートは尾道ふれあいの里温泉、第四駐車場（温泉の玄関から前方のグラウンドの向こうになる）です。ここから直ぐ西側に向かって山道に入ります。この辺りはキャンプ状になっていて、トイレや炊事施設などが完備されているので、道に迷うことはありません。これから一路「名水 岩倉の水」を目指します。行程は



約二キロアップダウンも僅かで楽な道です。一部車道もありますが、岩倉の水は旧御調町時代に整備され二十年以上になります。今では近隣の三原や福山方面から水を汲みに訪れる人が絶えません。此処にも先人の先見の明を感じています。コースはここから少し北側にあみぎこ向い、雨迫の山道に入ります。少し登り池のほりから頂上



に向い更に進んで尾根のルートに到着します。そこからは徳永方面に向かつて下り道です。平坦地に出て国道488号を横切り丸河南に進みます。目指すは金剛寺。金剛寺の東側の塀に沿って登り道になります。急坂で石ころが多く悪路になっていきます。標高358メートルを目指します。尾根道に入ると西方面の眺望が開けて素晴らしい田園風景を見ることが出来ます。目の下は大羽谷の急な溪谷です。折角登った山からこの谷底に向かつて下ります。

この大羽谷は、およそ十年前、近くにお住いの和泉さんが整備に尽力され、桜の植樹、簡易トイレを設置されたりして、子供達が遠足に来るなど結構賑わいを見せていました。しかしながら和泉さんが管理できなくなつて五年位になるでしょうか、今では、昔の姿になつて来ました。私が最も心配しているパターンです。人々が山に親しみ大勢が来てくれることを願うものです。

みとさか

さてトレランコースはここからまた山を登っていきます。目指すは「御調坂」。この場所は美ノ郷方面から八幡に向かう街道との交点になります。ここから中国自然歩道です。さすが公共の登山道です。標識など申し分なし。西に行けば御調八幡宮です。反対方向の東に進んで行きます。松永湾に流れる藤井川の源流付近です。ずっと下り道が続きます。途



中に名所の「彭祖の滝」等もあり素敵な溪流コースです。ここから道は北側に進み竜泉寺ダムに向かいます。この辺りは現在植林のため雑木が殆ど切り倒されて、南方面の眺望は完璧に開けています。尾道水道の向こうに天氣が良ければ四国山脈を望むことも出来ます。工事中のため一部わかりにくいところもありますが、ダムまで迷うことはないでしょう。尾道市の数少ない貴重な水源です。そこから今度は旧国道184号線に向かつて下ります。旧国道まで来たら今度は畑の峠までずつと登り道です。昔はこれが国道184号でしたが、現在はほぼ用済みで住民だけが利用されています。畑の峠は、御調町と美ノ郷町を完全に遮断しています。ここから右折れして国道を

離れ山道には入っていきまます。坂道を登って行くと小さな峠にさしかかります。国守と書いた古い石の道標から左方面を選び尾根道を北に向かつて進みます。

標高347メートルの「法光寺山」を筆頭に幾つもの小山が連なります。

尾根道はいろんな枝道があるので迷わないよう注意が肝要です。

殆どの遭難事故は下山するときに発生しています。まず第一は目標の尾根筋を間違えないこと。どれも同じような道に見えてきます。第二は方角をしつかり確認する事。この時磁石と地図が重要です。自分の感だけに頼ると思わぬ方向に進むことがあります。

尾根を歩いているつもりでも間違っている事が良くあります。おかしいなと思ったら、面倒がらずに元の所まで引き返すことが鉄則です。

下り道に入っていくと、その先に尾道北インターが見えてきます。山から下りる最後の所はかなり急でロープが設置されています。ここから御調盆地に入ります。御調は南北を300メートルから500メートルに囲まれています。西は八幡で山になります。

東は不思議な事に岡山の吉備地方まで平坦な地形で殆ど起伏がありません。此処が古代の吉備王国の最西端であったことが地形から伺われます。先にご紹介した特殊器台土器も大いにかかわりがあったと、素人目にも分ります。

これから進む岩根城跡は西の守りの一つであった事でしよう。岩根城の向かい側、国道と御調川はさんだ南側には、牛の皮城跡もあります。御調川の両岸には御調八幡宮までこの

様な山城が数多くあります。古城巡りだけのコースを組み、古代のロマンを訪ねるのも楽しいと思います。

車道に出たら岩根地区を目指し、高速道路の高架橋の下を、国道486号と御調川を横切つて北に進みます。いよいよコースは終盤に近くなってきましたが、ここは最大の急登です。喘ぎながら登りきる

とインターチェンジが真下に見えて美しい風景が広がります。岩根城址は更に登らなければなりません、コースはその裾を東に向かって進みます。岩根山の中腹を横切ります。府中方面の景色が開けて気持ちの良い所です。

岩根山の東端に来ると、八畳岩と呼ばれている巨大な岩盤があります。ここで西に向う尾根筋に登ります。

此処が「天神ひろば」で、やまなみハイウェイが眼下に広がり、更に向こうに瀬戸内海、天気が良ければ四国山脈も見えます。終盤の見せ場、岩根山貝ヶ原山（地王山）の縦走コースにな



ります。このコースには、大福ひろば、三角ひろば、こもれびひろば、中央ひろば、電波ひろばが点在します。それぞれのひろばに特徴があるので味わいながらゆつくりと進んでください。広場の説明は第七章に譲ります。

殆ど高低差の無い尾根の道は快適です。下り道になってきたら、岩根山はそろそろ終わりでいったん山田堂の平坦地になります。ここには、水田もあり開けた所です。堂の傍から再び山道に入ります。距離は短いので直ぐに中央ひろばに出ます。この広場は近所の皆さんが散歩で良く訪れます。近くに湿地帯があり、五月になると珍しい「ハチョウトンボ」を見ることが出来ます。貴重な生き物です大事にしましょう。

これから急な登り道を一気に竜王社まで進みます。標高236メートルの地王山三兆です。かつてここでは雨乞い神事が行われて来ました。ここから貝ヶ原山の縦走になります。徐々に下りますが、途中には「オカンノロ」と呼ばれる湿地帯があり、季節になると「サギソウ」が咲き誇ります。これも貴重な絶滅危惧種です。

天満宮まで少し、天然の岩でできた展望台を通過します。天満宮から車道に入り、神田神社の境内を通り過ぎ、国道184号の陸橋をわたって坂道を登っていきます。平坦な所で、ソフトボールグラウンドや、圓鑿美術館が見えてくると、40キロのトレイルは終わ

りです。ランナーはこのコースを六時間位で走られます。一般人にはとてもできる事ではありません。普通に歩いても変化に富んだ楽しいウォーキングが出来ると思います。三回ぐらいに分けた計画を立てれば良いでしょう。

2024年三月二日には100名の選手が参加される、第一回のレースが開催されます。どのように行われるのか、今から期待がふくらみます。

いずれここでトレランの全国大会が行われる日を夢見ています。

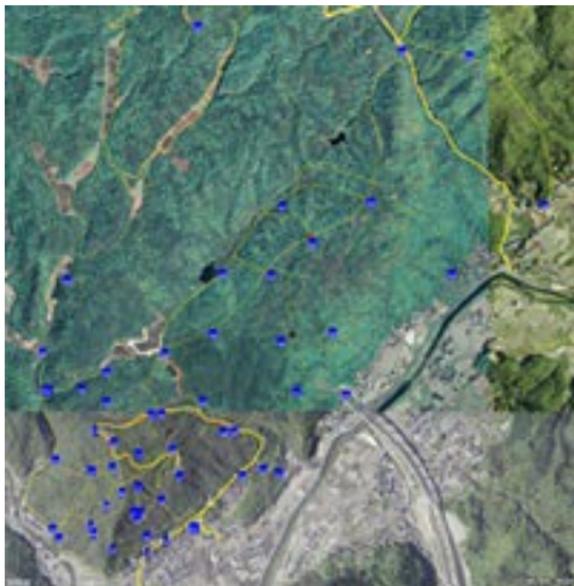
第六章 新しい道を作る

コースもワンパターンでは飽きられますから、多くのルート準備した方が良かろうと思い、今年の目標は「御調一周トレイル」としました。外周を一廻りすれば、約60キロのコースになる予定です。現在のコースにプラスすれば100キロになります。これが完成したら次の目標は残り60キロ、これで合計100マイル（160キロ）のコースになります。

構想のご紹介をしていきたいと思います。まず御調町の東端三郎丸、本村地区から入ります。左下の写真は、本村の旭霊園をスタートして、八田原ダムを夢吊り橋を目指すルートです。このルートには高压配線の高い鉄塔が十一本あります。



第七章 貝ヶ原里山自然公園について



これから少しでも多くの人に来てもらえるよう自然公園の見所を紹介します。上図はこの公園の中心的なマップです。誰にも知られなかつた有れ山を五年間かけて整備し、いまではこの元より近在はもとより広島方面から来て頂ける様になりました。関係者一同今までの努力が認められ嬉しく思っています。これからまだまだバージョンアップして行きますのでご期待下さい。



水神ひろばは、ため池として造られ貯水池を整備した憩いの場です。貝ヶ原の山裾の田んぼは水が不足がちなため造られた。正しい名称は新大池という。地図にも明記されている。造られた時の大きさは名前の通り大きくて、現在も上流には立派な石垣がある

ここまでが池であった。現在の大きさは三分の一程度である。この場所は山の地質が砂が多くて年々流出し池が埋め立てられた結果だ。

この池から田んぼまでの距離は、約2キロ、セメントも高価な時代に赤土で固めて溝を十て田んぼに届く水は僅かであったと思われるが、貴重な農作業のみずであった。徐々に砂で埋められた池

は使われなくなり池の岸辺は背丈より高い竹が茂り、池は全く見えない状態であった。池のほとりの道を整備している時、ここは綺麗だという人がいて、池の周りの笹を全て刈り取ることにした。笹は固くて、水辺の物は良く育ちなかなか手に負えない。草刈り機でない鎌はとも歯が立たない。しかし整備が進むと美しい水面が見えてきた。この池の水は、よほどの大雨が振らないときは全て砂で濾過されたものが池のそこから出ている。そのため濁りがなくとても綺麗です。池を周回できるコースも整備した。何か良い名前を付けるためいろいろ思案して、人々が少し怖れを抱くような名前にしようと考え現在の「水神ひろば」と命名した。太陽の位置により池の表情はいろいろ変化するが、最も美しいのは朝方の無風な時に周りの山々が湖面に映時であろう。多くの人を案内してきたが、皆さん一様に感歎される。今年はこのため池をつぶすそうであるが、どの様な姿に変わるのであらうか、とても心配です。

第八章 変革の時代「人新世」

私が生まれたのが1943年第二次世界大戦まつただ中である。今1950年以降地球年代では「人新世」と呼ぶ転換点だそうだ。

幼少時代の生活は現在までに様変わりした。私が七歳であつた1950年から地球の歴史

は大きくかわり、人新世という新しい時代に入ったそうである。

我々の年代は正しくこの時代に嵌った。世界的な現象として、今までの生活が大きく変わってきたのである。次の世代には昔の生活を語ることは出来ない。私は少しでも、自分の覚えていたことを、書き留めておきたいと思つてゐる。何から話を勧めようか。

以来73年生きてきたが、様々なものが大きく変わつてゐる。今まで見たこともなく想像すらできなかった物が、あれよあれよという間に広がり、到底ついていくことが難しい世の中だ。過ぎ去つた過去を少し見て行こう。

何から話を勧めようか。

衣食住というから衣服から入ろう。幼少時代は先ず和服であつた。子供も大人でもある。男子の正装は袴（我が家にもある）羽織はかま、履物はなんであつたか私には覚えがない。

子供の履物は男子も女子も藁草履、帽子はない。藁草履は雨に当たるとぐしゃぐしゃになって大変だった。

草履は各家で自分の物を作った。大人も子供も作ることができた。材料はお米を収穫した後の藁である。農家には何処も、収穫した稲の藁を全て保管する納屋を持っていた。藁はいろんなものに使われた。

ムシロ（これは今風に言うとかーペットか、畳が高価な時代であったから畳の代わりに板の床に敷いた。縄今風に言えばロープ。どこの家でも夜なべ仕事に藁で縄を編んだ。今では縄を中国から買っている

。牛馬の餌、餌を食べた後の糞尿を肥料として利用した。余すところなく全て使い切った。もちろんプラスチックなどはなおので、ごみとして捨てられるものはなかった時代である。現代は毎日毎日山ほどゴミが生まれる。饅頭一つでも、外から熨斗紙、箱、饅頭を包んだビニール袋、入れた容器、湿気を取る薬剤などなど沢山のゴミが発生します。

昔は現物を不要になった新聞紙などで簡単に包んであった。むすびを竹の皮で包んであった。竹の皮は用済み後又自然に帰る。今は何もかも用済み後燃やしている。燃やすことができないものは埋めている。

核のゴミも埋めるそうだ。これでは地球は持たない。人類は破滅に向かつて進んでいるという思いが拭えない。話が横道に逸れたが、やがて子供の服は学生服に代わる。しかしたった一枚の服を着て、着るものが今のように溢れてはいない。

破れたりほころびたりしたところは母親が繕ってくれた。洗濯は全て盥で手洗い。そう何度も洗えないので当然のことながら垢や泥にまみれ綺麗ではなかった。今はそんなものを見ることはない。衣服はどこにも溢れている。

住では五右衛門風呂について書いておこう。五右衛門風呂とは人が入れる容積の大きな鋳物製の釜で、大きさは大中あるがおおよそ200リットル。下から火を焚いて温める風呂の事だ。これも今は先ず見かけることはなくなった。我々の世代が終わると知った人はいなくなるであろう。昔安土代窯ゆでの刑があつて大盗賊の石川五右衛門が刑に処されてから呼ばれるようになった。湯が冷めにくいなどの利点もあ現在でも細々と生産されている。最大の欠点は火が燃やし難く湧くまでに時間がかかるがかることであつた。



法を説明しておこう。

五右衛門風呂には、「すいた」と呼ばれる貴重な用具がある。風呂は鎌に下で火をたくため、その部分が暑くなります。何もない状態で風呂に入るとやけどをし兼ねません。そこで活躍するのがすいたです。利用するにはコツがある。すいたは板を釜に合わせて円形に造ら

れている。これは入浴前には当然湯面に浮いている。この上に乗り体重をかけて釜の底まです沈める必要があります。すいたの中央ぬ片足を置きゆつくりと下げていかないといけません。急いでやると重心がずれてすいたが反転し浮かんでくるのです。

今の子供はこれがない。親の責任である。危険な事をさせない町家では殆ど風呂はなく、銭湯であった。銭湯はコミニケーション場で庶民の娯楽場になっていた。

田植えの風景も大きく変わった。元々田植えは、集落の大切な行事で、これを中心にした村の生活は行われていた。耕作の動力源は全て牛馬で正に人馬一体、弥生時代から続く稲作は全て集落の共同作業であった。集落の中が幾つかのグループになっていて



グループ全員の田植えが終った時、慰労のため、めったに食べる事のない肉や魚を買って、もちろん全員で作る。これは子供心に美味しかった。今思うと費用はどうやって分担したのだろうか。こうやって集落全員の大人も子供も含めて情報が共有化されコミュニケーションが図られた。窮屈な面もあったが、今では懐かしい。農村の生活を大きく変えたものにプロパンガスがある。

太古の昔より、煮炊きは山の木々を使って行なってきた。田舎の各家には木小屋といって、一年分の燃料を保管する場所があった。常にやまへ行き薪を集め家に持って帰り蓄えることは、生活の重要な一部分である。そのため山は綺麗になる。そして綺麗な所には松茸が出た。高価な茸で重要な収入源でもあった。それが、人々が燃料の調達をしなくなったため、山を荒廃させた。そして松枯れが広まり山は雑木だらけになり消えていった。マツタケを見なくなって50年以上になる。絶滅だ。今後再生することは絶対ない。50年前の航空写真があったので、

その頃の様子を記したい。この場所は私の家の向かい側にある法光寺山で標高300メートル屏風のように切り立って見える。山裾に御調川が流れている。この川によってすそ野

が洗われ現在のようになつた。この山の北面の写真であるが大きな木が一本もない。

これは毎年夏に芝刈りをするためです。面白のは刈った芝を下に降ろす方法です。急斜面のため背負つて降ろすことも出来ません。そのため誰が考えたのか分かりませんが、山上から川の対岸まで∞番線、直径 Δ mの針金を張つてロープウエーの要領で一束10キ口位のを吊るて降ろすのです。猛烈な勢いで滑つてくるため、着地点ではかなり大きな音がして止まります。写真に見える対岸の建物は中学校です。授業中にその音が教室の中まで聞こえていました。懐かしい夏の風物詩でした。吊るして降ろす滑車の数には当然数量に限りがあるので、頂上まで持つていかなければなりません。これは子供の役割でした。芝刈りをやめて50年今では10メートルを超える木々が生い茂り、成長の早い山桜が咲き誇る様になりました。花見ができるようになりました。目指すは吉野の桜山です。この様な光景も今書いておかないを誰も知る人が居なくなる。この危機感如何するか。

人間が作った文明に人間が脅かされる。核兵器、コンピューター等その最たるものあろう。

次々と新しいものが生まれてくるが私には人類の消滅に進んでいる姿が見える。恐竜がほろんだのも、どんどん大きくなってコントロールができなくなった結果ではなからうか。人類もここ最近急激に変化して、コントロールできなくなっている様に思える。やがて角れる、それが人類消滅の時であろう。

今心配していることに、記録を残す媒体が、急激に変わっていくことだ。昔の和紙に墨で書かれた記録は1000年経った今でも残っている。只これを完全に読むことは出来ない。今ある媒体はコンピュータのチップに入ってしまった。肉眼で見えることもできない。記録の媒体の歴史を見ると、草木、石、紙変遷してきた。それが此処わずかな期間に、写真フィルム、録音テープ、フロッピーディスク、CD、マイクロチップ等に代わっていった。

それぞれ専用の機械がないと見ることができません。今後劣化の寿命がどうなのか全く未知の世界です。今主流を占めるコンピュータの世界の信頼期間はどうか、人知の及ばない領域に入りそうだと。そうなると全てゴワサンスタートし戻るのか？

第七章 松茸絶滅

松茸は今や絶滅しこれから先復活することは考えられない。私の脳裏に残っていることを記録に留め、後世の人が何かの足しにしてくれれば光栄です。人類が滅ぼしたものは多々ある中で一つの事例にして貰いたい。

かつて松茸は我が村の重要な収入源であった

。先ずマツタケの収入は全て村の運営費に充てられる制度ができていた。何時頃から始まったのかは分らない。マツタケシーズンになると山全体が村の管理になる。期間は約一か月最終日が11月5かあった。この期間は、すべての山林所有者は自分の山の管理権を村に提供する。但し自分の好きなどを一か所だけマツタケの採取権を認められる。その他は全てまとめて大きな区分に分割される。分割された区画ごとに、採取権の入札が行われる。最も高額な金額を提示した人に採取権は与えられることになる。この入札金の中から、一部は山林の地主に配当され、残りは村の運営費に充てられる。よつてこの当時には町内会費などはなかった。結構な額であったのだろう。区画ごとに縄が張られて止め山問う言う札に採取権者の名前が記されていた。勝手に入つていくと泥棒になる。これを見

つけると村中総出で捕まえに行くことになる。そのような光景を見たこともある。マツタケは非常に重要な物であった。それが平成時代に入るところから急激に取れなくなった。原因はマツノザイセンチュウによる松枯れだという事になった。(注) 以下はウエブの記事より引用した。

マツノザイセンチュウとい
うのは、長さ1ミリの線の虫(ミミズを小さく、透明にしたようなもの)で、北アメリカから入ってきた生物です。

この生物が、マツの幹の中で増えてくると水の通り道をふさいでしまいます。そのため、マツの葉が急に赤くなって枯れてしまうのです(「マツ材線虫病」という病気)。でも、マツノザイセンチュウは自分で元気なマツの木まで飛んでいくことができません。マツノザイセンチュウはマツノマダラカミキリをうまく利用して元気の良いマツにとりつき、マツを枯らすほど数を増やしなが、また次のマツノマダラカミキリの体に乗って次々に広がっていきます。

マツノザイセンチュウはもともと北アメリカにいたもので、北アメリカでは元気なマツを枯らすことはないようです。これは、長い間にマツとセンチュウの関係がうまくできあがり、弱ったマツを少しだけ枯らすことで、マツもなくなならない、線虫もいなくなならない

しくみになっています。日本のアカマツやクロマツはマツノザイセンチュウと出会って100年くらいしかたつていませんので、抵抗力がほとんどないのです。アメリカでもヨーロッパ産のマツはマツノザイセンチュウによって枯らされます。

確かに直接の原因はマツノザイセンチュウであつたかも知れない。一網打尽にすべく、来る日も来る日もヘリコプターで農薬を散布した。センチュウも死んだであろうが、その他大勢の全てに生物が死んでいった。そして山は見るも痛々しい感じになり、今も松枯れは続いているのである。人々が薪を必要としなくなり、マツタケがでないので山の価値を見つめなくそして材木も海外から安く輸入し国産材は見捨てられた。その結果山が荒れて人心も荒廢した。国破れて山河ありではなく、山河敗れて人はなしである。人も地球の一員、自然を失つては生きて行けない。マツタケの最盛期は楽しかつた。マツタケ狩りに觀光バスが来た。お客さんは松茸狩りをした後、山頂の広場などですき焼き鍋を囲み酒盛りである。この風景も再び見ることはなからう。手に入れたものも多いが、失つたものは遥かに多い。ここらで一度リセットか？

松茸の話が長くなつたので他へ移らう。

